

影の立役者

桐朋女子中学校

中一

伊倉

蘭

「あー、どうしよう」

手汗かひどく、ドキドキが激しくなってきた。

オーバークリアーが流れてきて幕がスーッと

開く。まぶしい程の光がステージを照らし始

めた。私はゆくりと一歩をふみ出し、緊張

を悟らぬよう顔張って笑顔を作る。その光

と共にたくさんのお客様の視線が、せいに

自分に向かってくる気がして、はかしくな

り、目が泳いでしまい、一刻も早くこの光の

中から抜け出したい気持ちで一杯になった。

あれは一年半前、ミュージカルを習い始め

てた。た三月、初舞台の時のことだ。歌も

踊りも始めたばかり。端の方で目立たない

様にけし歌って踊らたら、勉強になるから出

てみたらと母も言うので、出演を決めた。

しかし、稽古が始まってみると、出演者は

平等に舞台上に立てるようにする、という考え

を携った演出家の先生。結果として、セリフは

5

10

15

20

少しだかかなりの割合舞台に登場する事になったのだ。また、自分に自信が無くあの光が嫌いだ。た。ホタニー一つで自動で動く幕や、勝手に流し出す音楽、とにかく追いついていく事に精一杯だった。

二度目の舞台は一年前。私たちを包む光と音楽に少しありかたさを感じられた。

三度目の舞台。自分の表現を舞台で発揮できるようになった。

「もつと表現を伝えたい、感じてもらいたい。」その思いに輝きを増してくる、照明、舞台装置、音響はいつも公演によりよってくれる黒子の様な存在である。それは私にとって不可欠なものであり、これからも長いお付き合いになりようだ。今までは人前に立つ自信がなかつた自分を、女優という幕に導いてくれた電気。これからも私に寄り寄り輝かせて下さい。宜しくお願いします。

5

10

15

20